

異分野融合に想う

巻／頭／言

最近、組織改革や研究プロジェクトの立案にあたって異分野融合というフレーズを意識することが多い。筆者も直近の新学術領域の活動や所属機関の改組に携わる中で、異分野融合に真面目に取り組んできている（つもりである）。これまで触れ合うことの乏しかったコミュニティに属する研究者同士が、異なるロジックや使用言語の壁を超えた知的相互作用を通じて新たな探究のベクトルを生み出す。それがもたらす所産もさることながら、こうしたプロセスそのものが刺激的で実に楽しい。

もっともこうした楽しみは、現代科学に携わる者の特権というわけではない。そもそも生物物理学という学問自体、その成り立ちにおいて生物学と物理学という異分野の大胆な融合から生み出された方向性であろう。学生時代、中二病であった（今でも？）筆者は生物物理学という異分野融合の響きに青臭く惹かれていたことは確かである。さらに遡れば、「学問は日進月歩するものなのに、セクショナリズムにとじこもるくらいみじめなものはない。」から始まる檄文（杉田元宜（1954）日本物理学会誌9, 123,「生物物理学のために」）がその源流にあることを知る。

筆者が学生時代を過ごした薬学部も化学と生物学の異分野融合の場であった。講義には滅多に出席しなかったが、薬品製造工学教室（当時）の清水博教授が要素還元主義の限界とバイオホロニクスの重要性を学部生に説かれていたことは印象に残っている。いずれ芸術や宗教も自然科学の対象になるのかしら？という思いさえ抱かされたものである。

異分野融合は必然的に異なるコミュニティの間の文化の相克を伴う。日本生物物理学会には60年近い伝統の中で培われた独特の文化とカラーとキャラがある。誤解を恐れずに言えば、筆者が学生時代に青臭く惹かれた雰囲気は今も生きている。ただ、時代とともに洗練されて、灰汁は薄まったようにも感じられるが、これは筆者の感性が低下したことによるものか。いずれにしても、日本の生物物理学として確立された学風は今後のどのような変転を遂げていくのだろうか。青臭い心の拠り所であり続けてほしいという思いもある一方で、想像を超えた得体の知れないものにトランスフォームしていくことを期待する気持ちも強い。もっとも、若手は生物物理学という枠組みを超えた異分野融合を無意識のうちにも推進するであろうから、彼女ら彼らにとってこのような駄文は余計なことに違いない。

加藤晃一, Koichi KATO

自然科学研究機構生命創成探究センター教授